



NEWS

イラク、フクシマ・・・日本.....	P.1
JIM-NETの福島プロジェクト.....	P.2
福島の子どもたち サマー・キャンプ・ダイジェスト ...	P.3
ハウラの赤い花.....	P.4
ナナカリ病院 新プログラムスタート.....	P.5
石巻 鎮魂の夏.....	P.6
地域をつなぐ千人風呂 不動の湯.....	P.6
アルビルから、こんにちは（その2）	P.7
参加団体ご紹介.....	P.7
鎌田代表のつぶやき.....	P.8
新刊のご案内.....	P.8
局長くん第7話	P.8

写真はハウラのお母さん
イラク人も日本の原発事故が気になる。

イラク、フクシマ ▪ ▪ ▪ 日本

井下俊 (JIM-NET理事)

1990年以降、イラクでは2000トンを超える劣化ウラン(DU)が使用された。ベクレルで考えると、イラクの南部中心に約60テラベクレル(テラは10の12乗)の汚染が生じたことになる。一方、福島市に残存するセシウム(Cs)137の量を土壤中の検出量と面積から推計すると、40~400テラベクレルになる。すなわち現在の福島市は、イラクとほぼ同等もしくは数倍の汚染が生じていることになる。伊達市や郡山市なども含めた福島の中通り地区全体で計算すると、福島県は明らかにイラクより大量の放射性物質で汚染されている。

そのような汚染であっても日本政府は「大丈夫」といい、ごく一部を除き福島県の中通り地区には避難指示は出していない。学校の閉鎖は行われず、子どもたちは屋外活動を控えざるを得ない不自由さの中で生きている。大丈夫なのだろうか?

将来的に200人に一人以上の子供たちが小児がんを発症すると警告する学者がいる。一方で、マスクは不要で、内部被ばくを恐れてビクビクして過ごす方が健康に悪いという学者もいる。どちらが真実なのだろうか?イラクのDU問題と同様、フクシマ問題もイデオロギーの対決の様相を示し、何が真実か見えなくな

り、福島県民は不安の中に放り出されている。不毛な水掛け論に終始し、福島の人たちを不安の中に放置しておいてはならない。将来生じるかもしれない福島の子どもたちの健康被害を、最小限にとどめる予防措置を講じなければならない。たとえ不幸な健康被害が生じたとしても、迅速かつ十分に対応できる医療支援体制を整えておかねばならない。福島の人たちは、今後数十年間は核害の中で生き続けなければならない。その福島の人たちの不安を少しでも解消すべく、誠実に行動せねばならない。JIM-NETでは遅ればせながら、そのための具体的行動を現在模索中である。

JIM-NETは今まで、イラクの小児がん支援を行ってきた。核の被害者を支援していくことは、被爆国である日本の義務であるからだ。福島の放射能汚染はどうであろうか?村上春樹の言うように、経済的豊かさのために、核に対しNoと言い続けることなく原発推進政策を容認してきた結果であろう。ゆえに我々は、福島の人たちの不安を和らげ、フクシマの大地から汚れを取り除かねばならない。それは義務であり、償いである。

JIM-NETの福島プロジェクト

佐藤真紀 (JIM-NET事務局長)

福島を何とかしたいという強い気持ちがあるっても、一体何をしていいのか、JIM-NETとしても手探りの状態です。まず、支援に先立ち、私たちのポリシーを明確にする必要があります。

▼福島イニシアティブ▼

福島の人たちが自分たちの未来を自分たちで決めていくことをJIM-NETはサポートします。

福島の人たちは、「逃げる」のか、「残る」のかといった判断を強いられています。確かに、福島の放射能レベルでは、避難したに越した事はないですが、それぞれの生き方、人生観、家庭の事情があります。

避難する人は、「逃げる」という後ろめたさを感じています。福島県で子どもたちの避難や疎開支援をしている人たちの話を聞いていると、ナチスドイツからユダヤ人をこっそりと脱出させるといった活動に似ています。

原発神話を崩したくないが為に、「安全だ。どうしてここを去るのか」という国家の喧伝に真っ向から立ち向かう勇気ある行為です。

一方、福島に残ると決心した人たちは、「原発事故を聞いたとき、もうこれで私たちは、加害者になってしまった。これから、放射能の影響でどうなろうが、覚悟は決めている。福島に残り、除染を行い、何とか、福島の未来を作りたい」と真摯に活動をしている人たちです。

JIM-NETは、逃げなさい、残りなさいといったことはいえません。福島の人たちが考えた舉句、選んだ決断です。目標が達成できるように、お手伝いし、未来を作りたいのです。

実は、大多数がいずれにも入らずに、放射能のことをあまり知らず、逃げるべきなのか残るべきなのか、ただ悩んでいます。そのためにも、JIM-NETができるのは、正しい知識や情報を提供したり、放射線の汚染を正しく計る為の装置などを供与することです。

▼東京責任▼

福島原発は、東京の電気を作るための原発です。東京都も東京電力の株主であり、都民には、もっとお起きな責任があるはず。日本人の豊かな生活を維持するために、アメリカが主導したイラク戦争に賛成した結果、イラクの子どもたちが犠牲になっていること。東京人の豊かな生活の為に、福島の子どもたちが犠牲になろうとしている様は、構造的に余りにも酷似しています。東京からもっとできることがあるはずではないでしょうか?

▼グローバルな取り組み▼

福島はすでに、ヒロシマと同じ、カタカナのフクシマになってしまいました。世界の中で、フクシマは、ネガティブなイメージでとらえられるのか、それとも、フクシマから、脱原発や、核兵器、劣化ウランの問題もふくめて発信し、世界平和に貢献するのかが問われます。グローバルな目線で考えられる若者をそだてるのも責務ではないでしょうか? 福島県民の中でも、フクシマがきっかけでドイツやイタリアが原発を止めることになったことを評価している人たちもいます。

▼イラクと福島をむすびつける▼

日本の支援を受けたイラクの医師や小児がんの患者たちが、日本を応援してくれています。そんな彼らの気持ちを伝え、日本を元気にしたい。JIM-NETは、彼らが送ってくれたメッセージや絵画を紹介していきます。

▼動き出した活動▼

JIM-NETの福島での活動が7月より始まりました。今、一番必要とされる「除染」を、「福島除染チーム」に参加し実験的に実施しています。また、子どもたちの避難・疎開に関しては、福島大学災害ボランティアセンターに協力し、サマーキャンプに100万円を拠出しました。現段階では、福島の声を伝えていくことの重要性も感じ、子どもを持つお母さんたちの生の声を、HPなどで流しています。

10月には事務所も福島市内に開設する予定です。



除染活動：

予想以上に除染活動は、大変。炎天下にこの格好で脱水症状を起こすこともある。また、ホットスポットは30マイクロシーベルトを記録する場所もあって、被曝対策を万全にしなければならない。除染方法にくわえ、作業者の安全マニュアルづくりも急がれる。

福島の子どもたち サマーキャンプダイジェスト

小玉直也 (JIM-NET福島支援担当)

東日本大震災に伴う原発事故以降、福島県内の各地で放射線量が上昇していきました。そのことにより、学校の校庭や公園など、屋外で遊べなくなつた福島の子どもたちは毎日、体育館で遊ぶか家に帰るかの選択しかなく多大なストレスを感じている状況です。そんな中、福島大学ボランティアセンターを運営している鈴木教授からの依頼で、JIM-NETは、福島の子どもたちをサマーキャンプに招待する企画に協力しました。

定員40人の10倍近い応募の中、抽選で選ばれた小学生は三重県伊勢志摩で海水浴やバーベキュー、テーマパークなど屋外を駆け巡り、子どもたちにも保護者にも大好評の企画となり、ぜひ今後も放射能のレベルが下がるまでこのような企画を続けていってほしいなど、多くの歓迎する意見が出されました。

今回中心となった福島大学ボランティアセンターは、震災後に南相馬市から福島市に避難してきた人々を福島大学で受け入れ支援する際、自発的に集まった学生を中心に発足し、震災後ボランティアに来た三重大学の学生と、福島大学ボランティアセンターが共同で実行委員会をたちあげ、準備してきました。



福島大学の鈴木教授（左）、学生たちと、小玉（右）。
社団法人 協力隊を育てる会からの資金協力により、
子どもたちにTシャツをプレゼントすることができました。

初日、初対面の子どもたちは、不安とぎこちなさもありましたが、班ごとに分かれ自己紹介をして旅が始まると、打ち解けはじめ笑顔あり涙あり喧嘩ありで、友達の輪が広がっていました。

名古屋港水族館では初めて水族館に来た小学生もいて大好評でした。夕方には伊勢志摩ユースホステルに到着し伊勢市長も歓迎の挨拶をする中、松坂牛をはじめ海産物など多くの差し入れのバーベキューが催され、おいしそうに食べていました。夕刻には上を向いて歩こうをみんなで合唱し、花火を楽しみ充実した2日目となりました。

3日目はメインイベントの一つ、海水浴です。三重県でバスを降りる際、「本当にマスクを外して外を歩いても大丈夫なんですか？」など心配する子どもたちがいる中、翌朝バスを降りて海水浴場に到着したみんなの笑顔と喜びは、言葉で表しようのない表情でした。海水浴やスイカ割りやレクリエーションなど、どの瞬間も忘れられない思い出になったと思います。

午後からは伊勢型紙を使ってのランプシェード作り、夕方からは志摩スペイン村でテーマパークのジェットコースターやピレネーや海賊の乗り物などを次々とこなし、大はしゃぎで楽しんでいました。



三重県伊勢志摩の浜辺。お天気にも恵まれました。

その他、いろんなドラマや成長がありながら、楽しいサマーキャンプは事故もなく終わり、福島駅に到着して別れる際は子どもたちが寂しさのあまり全員が泣きながらの感動の別れでした。学生たちもみな涙があふれる中、子どもたちとの別れを惜しんでいました。

ボランティアの学生たちは、子どもたちに楽しんでもらうため一生懸命考えてきました。メディアに子どもを出すか？子どもたちの体調を考えて体育館か海水浴か？など本気で意見をぶつけ質の高い議論ができました。サマーキャンプを通じて子どもたちや学生どうし、先生や大人たちとベストアンサーを探し続けた事ひとつひとつが彼らには何よりの宝となったでしょう。

鈴木教授が感慨深げに「6月の段階でJIM-NETさんの協力申し出がなかったら、サマーキャンプを予算不足で中止していたかと思うと感謝でいっぱいです」と語ってくださいり、うれしくなりました。

このサマーキャンプを応援してくださった皆さん、ありがとうございました。

今回のサマーキャンプを通して、子どもたちはリフレッシュでき、学生たちも成長して、大成功に終わつたと思います。しかし、福島に戻り体育館以外では遊べないストレスを感じながらの福島での生活を思うと、引き続き避難、疎開、除染などの福島支援の重要性を感じられます。

砂浜に「頑張ろう福島」と書いていた子どもたちの思いが心に残っています。

ハウラの赤い花

佐藤真紀 (JIM-NET事務局長)

毎年、チョコレートの図柄をデザインしなければならない。ただ、子どもの絵を使うというのではなく、イラクのがんの子どもたちと一緒に作りこんでいく過程が大切だ。今年は、震災で準備が出来ず、悩みながらも時間が過ぎてゆく。そんなある日、電話が鳴って、「HPにでているハウラちゃんの言葉を雑誌に使わせてください」という。震災が起ったときにハウラが寄せてくれたメッセージだ。「日本のこと思い、赤い花の絵をたくさん描きます。」ハウラは、サマワという町に住んでいる。2005年に白血病になった。バスラの病院までは300kmもあり、JIM-NETが交通費を出し病院に通わせた。彼女は、日本の支援に感謝していたので、何かしたいと思っていた。「そんな言葉が、被災地を勇気付けるんです」と編集者。ハウラがどんな絵を描いているのだろう? そんなハウラの気持ちを形にしたい。

6月の終わり、早速、私はアルビルに飛び、ハウラと会うことになった。バスラからイブラヒムがハウラと母親を連れて来てくれた。



ハウラとお母さん

「日本では、塩の値段があがったんでしょ。放射能のせいで。そのニュースは何度もTVで見たわ。私はいつも日本のこと心配していました」「サマワの生活は最悪ね。仕事はないし、電気はない、政府で働いている人はお金がまわっているけど。親戚ばかり雇うから仕事が回ってこない。夫は、日雇いの仕事をさがしています。仕事があったりなかったり。日本の自衛隊は支援をしてくれた。残念ながら、内戦で武装勢力が壊したり略奪していった。だからインフラも良くならない。」この町でも劣化ウラン弾が使用された。UNEPの調査によると、空間線量は0.03 and 0.22 μ Sv/h。しかし、破壊された戦車の表面は、50 μ Sv/hと高い放射能が計測されている。疫学的な実証は難しいが、サマワの医師たちは、小児がんが増えているという。しかし、一番不幸なことは、ほとんどの患者が貧しくて、初期の段階で病院にたどり着く事ができず、手遅れになって死んで行くことである。ハウラは数少ない治療がうまく行った例だ。



一生懸命に絵を描くハウラ

先日ジャーナリストとして、日本のメディアで働いていたワリードさんにあった。中立的な立場で報道していたが、感謝状を自衛隊からもらった。それから以降は、脅迫状が来るようになったという。脅迫状には、「サマワで侵攻軍と共に活動している自衛隊を好意的に報道するあなたと家族は許さない、絶対に追い回してやる」と書いてあった。未だにワリードさんは、隠れるように暮らしている。戦争の爪あとは深いが、サマワという地名も忘れられようとしている。

さて、ハウラとホテルにこもり、アクリルと水彩絵の具の使い方を教える。ホテルに咲いていたハイビスカスの写生から始める。日本を元気にする絵を描こうとひたすら描き続けた。10枚くらいの花の絵と、ハウラがサマワで描いた絵から4枚を選んだ。

翌日、ハウラをナナカリ一病院に連れて行った。C型肝炎の検査をサマワでするのが大変らしいので、アルビルに来たついでにやっていこうというわけだ。しかし、結果は陽性だった。輸血の際の感染がイラクでは多い。それでも、ハウラは笑顔を絶やすことなく、前向きだ。ハウラは、15歳。病気で3年遅れたが9月からは中学に入学する。



ハウラの絵でチョコのパッケージができました!

Pleasure for children, Comfort for mothers !

～子どもに楽しみを、お母さんに安らぎを～

ナナカリ病院 新プログラムスタート

阪口佳代 (JIM-NETアルビル駐在スタッフ)

アルビルのナナカリ病院で新しいプログラムを開始しました。この新活動には、皆で希望を込めて『Pleasure for children, Comfort for mothers (子どもに楽しみを、お母さんに安らぎを)』と名付けました。現在、その活動が少しずつ動き出したところです。

この新活動の目的は、病室の子どもたちの生活環境を整えて、病気の子どもと看病の母親を精神面でもサポートすることです。内容は次の通りです。

*** 現状 ***

病室内の子どもたちは、何もせずにじっと寝ているだけで、入院生活、闘病生活の中にも小さな楽しみを感じられる環境や機会が無い。医師や看護師も多忙で精神面でのケアは現状無理。泊まり込みで付き添う母親達は、症状の重い子供たちに付き切りで、心身共に疲れている。病室も狭く、子どもが重篤な状態であっても母子は一つのベッドに寝るなどスペースの問題も大きい。物理的にも精神的にも母子の密室、密着状態である。



入院中の子どもには母親が泊まりこみで付き添います。

*** 必要なこと ***

子どもたちが病床にあっても少しでも楽しく過ごせること、同様に母親が少しでも休息や安らぎを得られること。

*** 活動内容 ***

子どもの遊び場作り。病室内に、皆で遊ぶため、集まるための場所（テーブル・椅子）と道具（本、お絵かきの道具、勉強道具、おもちゃ、ゲーム等）を提供。

好きな時に好きな遊びができる場所、また子どもたち同志と一緒にいられる場所を作る。



皆で一か所に集まって絵を描くことにしました。

*** ボランティアの参加 ***

ボランティアの大学生が定期的に病室を訪れ、子どもたち・母親たちとの遊びやコミュニケーションなど、活動サポートを担う。

以上が簡単な活動内容です (JIM-NETのHPの現地レポートにもう少し詳しく活動の紹介をしましたので、よろしければそちらをご覧ください)。

この紙面で最後にご報告することは、子供とお母さん、病院、そしてボランティアの、これまでの反応や変化です。

子どもたちとお母さんたちの反応は私たちの期待以上でした。私たちが病室に行くと「今日は何をする?」、更には「今日は何をしたい」と自分の希望を口にする子どもが出てきました。お母さんは、子どもがボランティアと遊んでいる間に横で寝入ったり、または自らも興味津々で、気が付くと一緒に参加しています。ナナカリ病院にも変化がありました。

JIM-NETには専用のプレイルームを用意する予算が無いため、狭い病室内にテーブルを出し入れして活動していますが、活動開始後に、病院自らが資金調達のために動き出しました。そして、ボランティアについて。この活動の「肝」とも言えるのが、ボランティアの参加です。このような形の「ボランティア活動」は、当地ではチャレンジで、現在も今後も簡単なことではありません。しかし、ボランティア学生が来てくれた時の子どもたちの本当に嬉しそうな顔を見るにつけ、そしてボランティア学生の「意識が変わった（役に立ちたいという思いから、逆に活動から自分が与えられていると感じるようになった）」という感想を聞いて、苦労し甲斐のある挑戦だと感じています。



ナナカリ病院、ボランティア、ジムネットで、定期的にミーティングを行うことにしました。

これからも、病院、患者、ボランティア、JIM-NETの「みんなの活動」として、皆で試行錯誤を繰り返しながらこの新活動を進めていきたいと思います。

石巻 鎮魂の夏 ~1万の燈籠に思いをのせて~

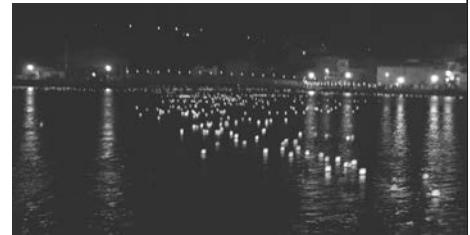
川添 圭子(JIM-NET看護師)

石巻では毎年、川開き祭が開催されています。今年は例年より、静かな、鎮魂という意味の強いものになりました。

この日、私たちボランティアは燈籠流しのお手伝いさせていただきました。川開き祭に参加表明をした団体の代表者が数か月話し合いを重ね、当日を迎えました。JIM-NETからは5名がボランティアとして参加しました。私自身は、燈籠を流し出す桟橋の1号機の指揮をさせていただきました。桟橋1号には他団体の方が多く、本当にたくさんの方と協力し合うことができました。燈籠が流れて行く様子を涙ぐみながら見つめる石巻の方がたくさんいらっしゃったのが、印象的でした。流れる燈籠は本当に綺麗で、幻想的でした。あの美しい光が、鎮魂になればと心から思います。

川開き祭も終わり、また医療支援へと戻ります。今回は、1つの活動をご紹介します。8月初旬、リピーター ボランティアナースの日下部さんと二宮さんとの協力を得、緊急通報システムのチェックを行いました。緊急通報システムというのは、独居の高齢者が使用している警備会社につながるナースコールのようなもの。それが

震災後きちんと機能しているかどうか、利用者名簿を見ながら一軒ずつ訪問してきました。



(旧北上川 対岸の灯は住吉神社)

なんと皆さん使い方もわからない、どこにあるかわからない等さまざまな問題も発生! 警備会社の方と連絡を取り合いながら回りました。ただ、皆さんとてもお元気! 独居でいらっしゃるので、お話し相手が来た! と盛り上がりてしまい、1時間半も話しこむなど多くのお宅を回ることができない日もありました。

そうやって回り続け、3日で全家庭、訪問してチェックすることができました。お話をじっくり聞きながらたくさんのお宅を回るということは普段あまりできないので、私たちにも良い経験になりました。

今後も地域の皆さんとともに復興に向けて頑張っていきたいと思います。

地域をつなぐ千人風呂不動の湯

熊谷 宏 (前JIM-NET石巻地区担当)

震災から5か月、石巻の主要な道路の瓦礫は片付けられ、街は復興へ向けて大きく前進しているかのように見えます。しかし、被災した市民の多くがまだまだ復興からは程遠いところにいます。仮設住宅の建設の遅れなどの理由で2000人以上(8月22日のデータ)が避難所から出ることができずにいます。津波によって1階部分が水に浸かってしまった全壊または大規模半壊の住宅に住む被災者もたくさんいます。(全壊地区では9月11日まで建築制限がかけられていて新築や増改築ができない。その上、行政からは大規模な修繕は見合わせるようにとの要請が出され、水周りなどの大規模な修繕は難しい。したがって入浴サービスは少なくとも9月末まで、場合によつては初雪が降るころまで必要と見られる。)一見するときれいになった表通りですが、大潮になれば冠水する地域も少なくありません。また、通りから一步路地に足を踏み入れれば手つかずのまま放置されている家屋が



まだたくさんあります。石巻には、片付いた大通りとは裏腹に、復興とは程遠い厳しい現実があります。

千人風呂プロジェクト不動の湯は

4月8日にサービスの提供を始め、7月15日の移転(場所を提供してくださった永巖寺の仏事の都合から、永巖寺駐車場から中央1丁目7-13へ移転した)、8月15日をもってJIM-NETから地元町内会へ運営を移行するという大きな変化はありましたが、一貫して、地域住民に入浴サービスを提供してきました。そしてその間、不動の湯は、地域の皆さんが気軽に立ち寄り、ひと時の憩いを得る場となっていました。特に用はなくとも立ち寄ってスタッフや居合わせた方とおしゃべりをしたり、学校帰りの子どもたちが寄り道をして遊んだり、宿題をしたり、不動の湯はそんなコミュニティ・スペースとしての役割も持つようになってきたのです。

この役割を地域の人々が高く評価し、今後の復興の過程でこういった場が是非とも必要であるということで、入浴サービスを終えた後もコミュニティ・スペースとしての機能を維持していくことになりました。そして地域から私に、その「場づくり」の役割を担うようにと要請がありました。そこで、8月15日の地元への運営移行と同時にJIM-NETを離れ、入浴サービス終了後へ向けて石巻に残ることになりました。簡単な仕事ではありませんが、こういったことで復興のお手伝いをさせていただけるのは望外の幸せだと思います。どうぞこれからも石巻への篤いご支援をお願いします。

※ 千人風呂の今とこれからは、<http://1000furo.com>をご覧ください。

(冠水した「千人風呂不動の湯」前の通り)

～アルビル（Erbil）から、こんにちは（2）～

皆さま、お元気ですか。前回の着任挨拶から3ヶ月が経過しました。様々なことを初体験しながら、活動と生活の基盤作りに走り回っているうちに3ヶ月が過ぎたところです。周りの人々の協力や人情に助けられながら、気がつけばアルビル生活にどっぷり漬かった毎日を送っています。

6月末には、事務所兼宿泊所を移転しました。4月の到着以降、電気も水道も壊れていた旧事務所でサバイバル生活を送った結果、引越しを敢行。新物件探し、新事務所の設置等大変な作業でしたが、これでやっと仕事も生活も以前より落ち着いて進めることができるようになりました。とは言え、イラクは毎日のように停電が起こるため、電源が確保できても、肝心な電気が来たり来なかつたり。事務所の電気が毎日突然切れるのに苦労しています。

さて、今のアルビルを一文字で表すならば、迷うことなくそれは「暑」、いや「熱」でしょう。こちらは今、1年で最も暑い季節の真最中で、私自身これまで他の国や地域では経験したことの無い種類の「熱さ」を体験中です。イラクでは、気温の公式発表が50度を超えると、その日は学校やお役所など公的機関が休み

阪口佳代（JIM-NETアルビル駐在スタッフ）

になるという決まりがありますが、この2ヶ月間はその「50度超休日」が何度もありました。驚くことには、この夏の後には、普通に秋、そして冬がやって来るそうです。冬には雪が降ることさえあるなどと聞きますと、こちらの気候の厳しさ、強烈さには文句を言う気（力）も無くなり、恐れ入りました！と感心（降参）してしまいます。

そして、8月1日から今年のラマダンが始まりました。一番暑い季節にぴったり重なった今年のラマダンです。日中は誰もいない道に太陽だけが照りつけていますが、夜になりラマダン明けのお祈りと食事が終わると、外は一転楽しげな声や音で賑やかになり、それが深夜まで続きます。

酷暑の中でも、毎日がお祭りのようなラマダン。月の形が、いよいよそのクライマックスに近づいてきたところです。



お絵かきワークショップに参加した子どもたち

参加団体紹介（No.7）認定NPO法人 JVC/日本国際ボランティアセンター

谷山博史（JVC代表理事）

～地域からの平和、地域の再生をめざして～

JVCは1980年にインドシナ難民を救おうとタイに駆けつけた若者たちと在タイの主婦のグループが中心となって設立されました。その後難民支援と平行して、カンボジア、ラオス、ベトナムへと難民の故国の人々を支援するために入行ってきました。またバンコクのスラムで生活環境を改善する活動を始める一方、タイの農村の支援活動も始めました。ソマリアの難民支援、エチオピアの飢餓に際しての救援活動と農村の再生、アパルトヘイト下の南アフリカやイスラエル占領下のパレスチナでの人間の尊厳を守るための活動、アフガニスタン戦争やイラク戦争に際しての緊急救援と復興支援、内戦終結後のスーダンでの復旧支援、北朝鮮・日本・韓国の子どもたちの平和のための交流活動というように、地域と領域を多様化させながら問題の根源へと活動を深化させてきました。

イラクでは現在JIM-NETのメンバーとして医療支援にかかわるとともに、イラク中央政府とクルド自治政府の係争地であるキルクークにおいて現地のNGOと共に「子どもたちと作る地域からの平和」と称して異なる民族の子どもたちによるアートのワークショ

ップを開催しています。今年で3年目となるこの活動で保護者や教師のみならず、地域の有力者の間にも少しづつではありますが、子どもたちの未来を見守る中から、民族同士の対立を地域で防いでいかなければならないという意識が芽生えてきています。

今回の震災と原発事故に際して宮城県では、気仙沼や岩沼の災害ボランティアセンターの運営支援を続けてきました。現在は気仙沼の鹿折地区に焦点を絞って地域の再生の手助けをしています。また福島では三春町の農家を支援するとともに、南相馬の臨時災害FM局の運営のためにスタッフを派遣しています。イラクでも福島でも、分断されていくコミュニティをいかに繋ぎとめ、地域の人びとが新たな地域社会の担い手になれるよう支えることに注力しています。



南アフリカ共和国リンボボ州の子どもたちと谷山代表理事

鎌田代表のつぶやき

被災した若者たちの悲しみや強さをしみじみと感じています。カタログハウスと茅野市が協力して、信州に「ふくしまっ子の夏休み」へ7泊8日で約千人のお母さんと子どもたちを招待しました。そのとき、僕の「健康と放射能」の講演のあと、15歳の女の子が話しかけてきました。「— 私、大人にならたら、結婚して子どもを生むことができるでしょうか。— 真面目な若者にこんな不安感を抱かせてしまった原子力というのは何だったのか。悲しみと同時に怒りがあふれてきました。

8月15日、NHKラジオの「鎌田實と命を語ろう」を仙台から生放送しました。女川の小学校6年のヒロカさんは、津波でおばあちゃんとお母さん、お姉さんを亡くしました。先祖のお墓も流されました。そんなヒロカさんがこんなことを言ってくれました。
「小学校の校庭まで津波が押し寄せてきました。でも、校庭のヒマラヤ杉はどっしりと構えて、倒れませんでした。」「なぜだろう」と校長先生が聞いた。ヒロカさんはこう答えた。
「何千人の卒業生やたくさんの人たちに優しく暖かな眼差しで見つめられてきたから負けなかったのだと思います。」「そうなんだ。暖かな眼差しが大事なんだ。

最後にヒロカさんがこんなふうなことを言ってくれました。
「私が生きているということは、何かの役目があるから生き残ったのだと思います。」

被災地の傷は、深く、広く、ひどいです。
でも子どもや若者たちは必死で生きています。
まだまだ日本も捨てたものではありません。
あたたかな支援を続けていきたいと思います。
ぜひひぜひJIM-NETに応援をよろしくお願ひします。



～新刊のご案内～

『希望 命のメッセージ』 鎌田實&佐藤真紀著

9月1日、鎌田實代表初の写真エッセイ集、『希望～命のメッセージ』が発売されました。佐藤真紀事務局長との共著です。

被災地を歩いていて、小学校の壁に習字の「希望」という字を見つけた。なかには亡くなった子もいるという。この子の分まで、ぼくたちは「希望」を持ち続けないといけないと思った。

希望あふれる社会をつくりたい。
強くて、あたたかくて、やさしい
国をとりもどそう。子どもたちの
夢と希望をとりもどそう。



これまでJIM-NETが支援してきたイラクの子どもたちからも、たくさんの応援をもらいました。どこにいても復興には希望が欠かせない。生き抜くための哲学が優しい言葉で綴られています。

全国の書店およびAmazonにて発売中。1,470円(税込)東京書籍
この本の印税はJIM-NETを通じ被災地の子どものために使われます。

局長くん 第7話

高橋マリモ



福島のお母さんから話を聞く

局長も単身赴任中。息子に忘れられないよう工夫しています。

編集後記

東日本大震災から半年
余り。いろいろなことが
凝縮した日々でした。
一方、それによって、
まだこの大震災を知らず
幸せだった年月が、瞬く
間に遙か遠い昔のことと
なったようと思われます。
一方、それによつて、
まだこの大震災を知らず
幸せだった年月が、瞬く
間に遙か遠い昔のことと
なったようと思われます。
これから日本が歩む道。
まだら模様の過去が希望
と絆で紡がれ、美しい
未来へ繋がる強い力となり
ますように。

JIM-NET便り 2011年9月号
発行: 日本イラク医療支援ネットワーク
発行日: 2011年9月20日
〒171-0033
東京都豊島区高田3-10-24 第二大島ビル303
info-jim@jim-net.net ☎ 03-6228-0746